

こうしんとう 庚申塔とは その1

文化財用語解説-②

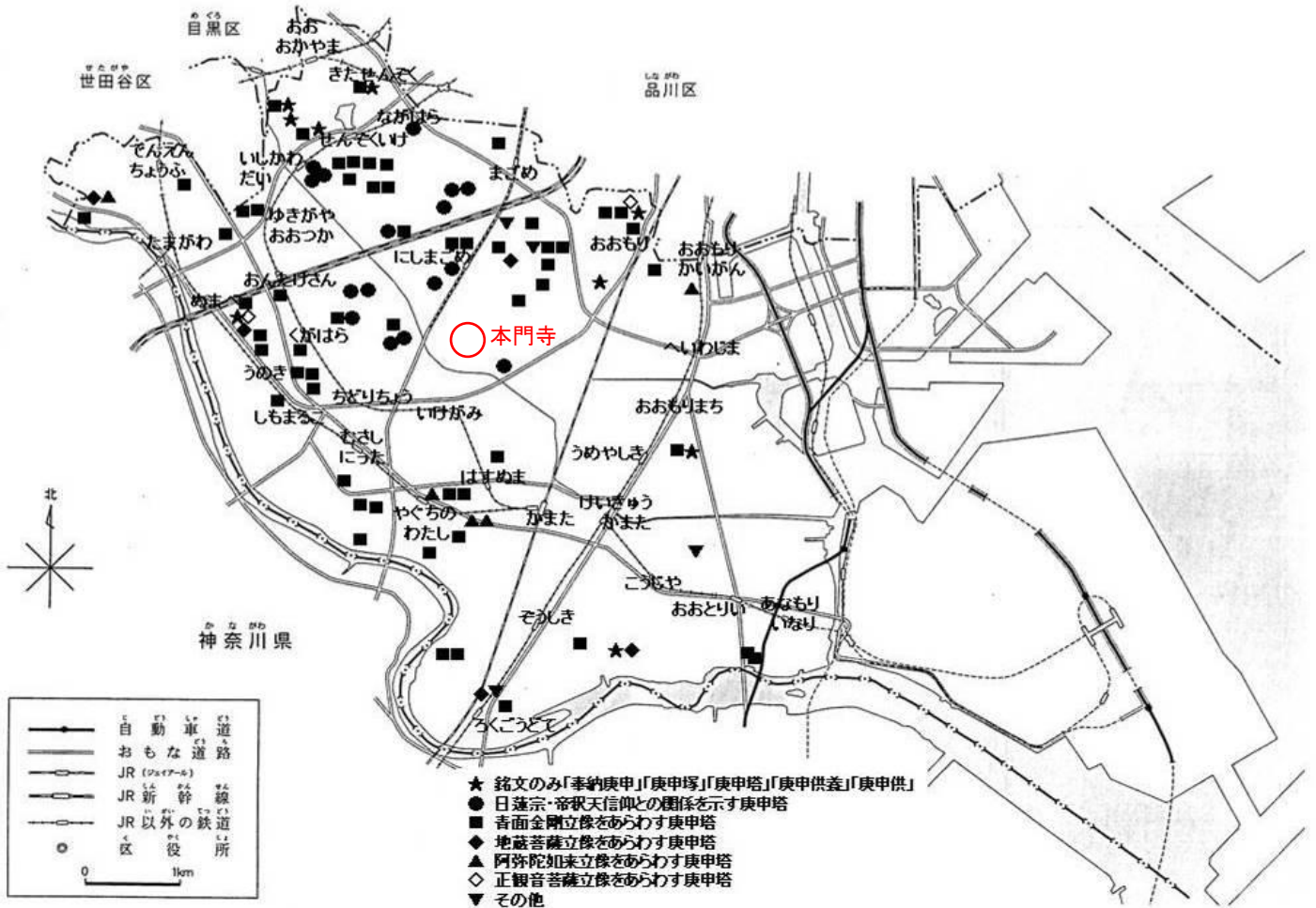
道路沿いの角地などに、小さな堂宇に祀られた石塔や石造仏を見かけたことがあるのではないのでしょうか。皆さんは、それが何かご存じですか。全国的に見れば、そうした場所には道祖神やお地藏様、馬頭観音などのさまざまな神仏が祀られていますが、大田区の場合はその多くが庚申塔（庚申供養塔、庚申塚とも）と呼ばれるものです。庚申塔とは、60日ごとに訪れる庚申の日（十干十二支のうちの1つ）に、徹夜で過ごす「庚申待」を一定の期間または回数（一般的には3年、18回など）続けることで行を達成し、その記念と供養のために造立が始まったものです。

この“庚申信仰”は、古代中国における道教の思想が発祥とされ、人の体内に住む三尸という虫が庚申の日の晩だけ宿主が寝ている間に抜け出し、天帝（神）に宿主の悪事を報告して寿命を縮めてさせてしまうと考えられたため、庚申の日は寝ずに過ごして三尸の脱出を防ぐ「守庚申」が行われました。日本でも平安時代には上流階級の間で広まりますが、厳粛な内容ではなく夜更かしを“楽しみ”と捉えて徹夜で詩歌や歌舞、飲酒に興じるものでした。室町時代以降は仏僧などの布教により宗教色を帯びた民間信仰として浸透し、庚申待を行う単位として「庚申講」が地域ごとに結成されていきました。この庚申講の人々によって、庚申塔は建てられたのです。

江戸時代になると、人々は神仏への崇敬の念を示すほかに、徐々に自身や地域の息災を願う意味も込めて塔を建てるようになりました。中には、ほかの石塔・石造仏の役割も兼ねて道標や境界を示すものや、富士信仰と習合して富士山を彫ったものも現れます。庚申待についても、宗教行事というより娯楽的な要素が強かったため、都市部よりも娯楽の少ない農村部で流行していきました。大田区域では98基の庚申塔が現存していますが、海側（東海道沿い）である大森、糀谷、六郷、羽田などの地区には少なく、台地上の千束、馬込、雪谷、久が原、領町、鶉の木など旧農村部に多い傾向があります（次ページの分布図参照）。

また、大田区における庚申塔の大きな特徴として、日蓮宗の特色を持つ塔が見られるという点があります【分布図の●印】。これは在地の庚申講に日蓮宗が影響を与えたということではなく、日蓮宗信徒が塔を建てたことによります。つまり、区内には日蓮宗大本山である池上本門寺【分布図の○印】があったため、周辺住民もその多くが日蓮宗信徒となり、集団で題目（南無妙法蓮華經）を唱える「題目講」を結成する一方、同じメンバーが庚申講も兼ね、庚申塔を造立したのです。日蓮宗系庚申塔の特徴としては、題目を彫った塔【いわゆる鬚題目、次頁写真①】や、特に日蓮宗で尊崇される帝釈天を前述の「天帝」と同一視し、その名前を彫った塔【次頁写真②】などが見られます。

なお、庚申塔の造立は幕末以降ほとんど行われておらず、庚申待も回数を減らしたり散会時間を早めたりと、地域の繋がりの希薄化や他の娯楽の発達に伴い、講としての活動は徐々に縮小されていきました。しかしながら、現在でも自治会や町会の有志が地元の庚申塔の周辺整備やお参りを続けるなど、変わらず信仰が続いている地域もあります。



大田区に所在する庚申塔の分布図



写真① 題目を彫った庚申塔
仲池上2-4 堂宇内



写真② 帝釈天名を彫った庚申塔
久が原2-7 堂宇内